

ベクトル空間の定義

定義 0.1 (ベクトル空間). F を体とし, F の元をスカラーと呼ぶ. 空でない集合 V が F 上のベクトル空間であるとは, V の元に対して, ある 2 つの演算が定義されていてある性質を満たしているときをいう.

- 加法と呼ばれる演算が定まっていて, $+$ を用いて表し, $(u, v) \in V \times V$ に対して $u + v \in V$ を対応させる.
- スカラー倍と呼ばれる演算が定まっていて, 並べて書き表し, $(c, u) \in F \times V$ に対して $cu \in V$ を対応させる.

さらに次の性質が成り立つ.

- (i) 任意の元 $u, v, w \in V$ に対して, $u + (v + w) = (u + v) + w$.
- (ii) 任意の元 $u, v \in V$ に対して, $u + v = v + u$.
- (iii) V のある元 0 が存在し, $0 + u = u + 0 = u$ を任意の $u \in V$ に対してみたく.
- (iv) 任意の元 $u \in V$ に対して, V の元 $-u$ が存在して, $u + (-u) = (-u) + u = 0$ を満たす.
- (v) 任意のスカラー $a, b \in F$, F の単位元 1 と任意の元 $u, v \in V$ に対して, 次が成り立つ.

$$a(u + v) = au + av$$

$$(a + b)u = au + bu$$

$$(ab)u = a(bu)$$

$$1u = u$$

- ベクトル空間のことを線形空間ともいう.
- ベクトル空間 V の元のことをベクトルという.
- ベクトル空間 V に対して, F を係数体という.
- \mathbb{R} 上のベクトル空間を実ベクトル空間といい, \mathbb{C} 上のベクトル空間を複素ベクトル空間という.
- 条件 (i) から (iv) は $(V, +)$ がアーベル群であるということ.

定義 0.2. U をベクトル空間 V の空でない部分集合とする. U の 1 次結合とは,

$$a_1 u_1 + \cdots + a_n u_n = \sum_{i=1}^n a_i u_i$$

という形のベクトルである. つまり, ベクトル $u_1, \dots, u_n \in U$ をそれぞれ $a_1, \dots, a_n \in F$ 倍したものの和である. スカラー a_1, \dots, a_n を 1 次結合の係数という. 1 次結合が自明であるとは, すべての係数 a_i が 0 であるときをいう.

ベクトル空間の例に関しては次回にする.

定義より簡単に得られる性質

$\mathbf{0}$ を零ベクトルという.

命題 0.3 (零ベクトルの一意性). ベクトル空間 V の任意のベクトル v に対して,

$$v + \mathbf{0} = v \quad (1)$$

となるような V のベクトル $\mathbf{0}$ が v によらずにただ一つ存在する.

Proof. 一意性について示す. いまベクトル $\mathbf{0}$ と $\mathbf{0}'$ が (1) をみたすとする. 任意のベクトル v, v' に対して, 定義 (iii) より, 次が成り立つ.

$$v + \mathbf{0} = v$$

$$v' + \mathbf{0}' = v'$$

ここで v と v' は任意だったので, $v = \mathbf{0}'$ と $v' = \mathbf{0}$ を代入して,

$$\mathbf{0} = \mathbf{0} + \mathbf{0}' = \mathbf{0}' + \mathbf{0} = \mathbf{0}'$$

を得る. □

命題 0.4. あるベクトル x が, あるベクトル v に対して,

$$v + x = v$$

となるならば, $x = \mathbf{0}$ となる.

Proof. v に対して $-v$ が存在して, $v + x = v$ の両辺に加えることで, 左辺は

$$v + x + (-v) = v + (-v) + x = \mathbf{0} + x = x$$

となり, 右辺は $v + (-v) = \mathbf{0}$ となるので主張を得る. □

命題 0.5. 任意のスカラー $a \in F$ と任意のベクトル v に対して,

(i) $0v = \mathbf{0}$

(ii) $a\mathbf{0} = \mathbf{0}$

(iii) $(-1)v = -v$

Proof.

$$0v = (0 + 0)v = 0v + 0v$$

したがって両辺 $-0v$ を加えると,

$$\mathbf{0} = 0v$$

を得る. また, 定義から $\mathbf{0}$ は $\mathbf{0} + u = u + \mathbf{0} = u$ を任意の $u \in V$ に対してみたすので, 特に $u = \mathbf{0}$ とすると,

$$\mathbf{0} + \mathbf{0} = \mathbf{0}$$

が成り立つ. よって

$$a\mathbf{0} = a(\mathbf{0} + \mathbf{0}) = a\mathbf{0} + a\mathbf{0}$$

となるから $a\mathbf{0} = \mathbf{0}$ が成り立つ.

定義より $1v = v$ であるから,

$$v + (-1)v = 1v + (-1)v = (1 - 1)v = 0v = \mathbf{0}$$

となるから両辺 $-v$ を加えると,

$$(-1)v = -v$$

を得る. □